

格差と差別

— 貧困の問題をめぐる —

神戸 修

(一財) 同和教育振興会事業運営委員

一、格差と貧困

「貧困」「格差」という言葉からいつも想起するセリフがあります。ドストエフスキ一の最晩年の傑作『カラマーゾフ兄弟』の中で、仕事も財産も名誉も失い病の床にある惨めな父親・二等大尉スネギリヨフが息子・イリユーシャに語るものです。「パパ、世界中で一番強い人は金持ち?」「そうだよ、イリユーシャ、金持ちほど強い人は世界中にいないよ」^{*1}初

めてこの言葉に接した十代後半、異様な感覚に襲われ思わずつっこみました。「父親が小さい息子にそんな言うたらあかんやろ!」

ドストエフスキ一(1821~1881)の時代は、「農奴解放」後古い価値観が揺らぎ、「ニヒリスト」が出現(『悪霊』のスタヴローギン!)、剥き出しの貪欲な資本の論理が横行し、大量の貧困層が都市部にも形成され、「儲けた者勝ち!」の「金がものをいう」時代でした。貴族制度は厳然と存在し格差は大きく、

皇帝による専制は強化され皇帝暗殺計画

が次々と失敗に終わっていました(ドス

トエフスキ一が死んだ1881年に爆弾に

よって皇帝アレクサンドル二世が暗殺され

ます)。ドストエフスキ一が生きたロシ

ア社会は、まさに途方もない「貧困」と

「格差」の時代だったのです。押し寄せ

る「貧困」と「格差」の波に抗して、少

年イリユーシャは貧困ゆえに冷たくあし

らわれる父親を懸命に守ろうとします。

その意味ではこの健気な少年は「格差」

と「貧困」を告発するか細い声の象徴で

した。因みに、『罪と罰』の主人公ラス

コーリニコフが、貧困者から法外の利息

を取り「鱈腹貯め込んでいる」金貸しの

老婆(格差社会のある意味では勝者)の財

産を奪い貧しい人に分配するという「善

行」に憑かれた青年であることも象徴的

です。ただ、この法学部の学生の「善行」

の手段は「殺人」でした。

時を超え場所を移して現代の私たちの

世界。『朝日新聞』(2020年6月2日

付)は「差別へ怒り コロナが火」とい

うリードで「白人警官が黒人男性の首を圧迫して死なせた事件をきっかけとした米国での抗議活動は、5月31日も各地で続いた。(略)デモの背景には、繰り返される黒人への差別に加え、新型コロナウイルスによってあぶり出された格差の問題もある」と指摘、「富める者はより豊かに、貧しい者はさらに貧しくなる」と、個人プールの清掃会社に時給15ドルの半年契約で勤める黒人女性の声を紹介しています。彼女の悲痛な叫びはまさに「お金持ちほど強い人はいない」社会の告発です。

日本でも同じような格差が広がっています。「格差」と「差別」はつながらない、「差別」はダメだが「格差」は仕方がない、という意見もあります。しかし①努力によって自ら財産や地位を獲得できる十分な機会が平等に保障されていない、②格差による不利益が人権侵害と言うべき状態である、③格差による不利益が個々人の慈善などによって救済不可能なほど大量に出現している、という日本の今の状

況は、「仕方ない」では済まされません。

特に最近の新型コロナウイルス禍による打撃はひどい。同じく『朝日新聞』(2020年5月31日付)は「労働者の4割近くが非正規雇用。一部の人たちは会社の寮や派遣先のアパートに入り、景気が悪化して、派遣切りや雇い止めになった瞬間、仕事と共に住宅まで失くしてしまいます」というホームレス支援団体代表の声を紹介。「ステイ・ホーム」以前に「ステイ」する「ホーム」を失った人が大量に出ている。同じく「脅かされる生存権」(5月26日付)、「休業527万人新規求人22%減 非正規失業97万人」(5月30日付)など。しかしこの状況は、新型コロナウイルス禍がもたらしたというより、社会が抱える格差構造が表面化したと捉えるべきです。

二、貧困とは

「貧困」を分析する概念装置として、「絶対的貧困」と「相対的貧困」があり

ます。「絶対的貧困」とは「人が生存していくための必須の条件が欠けていること」^{*2}。貧困ゆえに「餓死する」「凍死する」などの問題です。「貧困」というと「絶対的貧困」が想起され「貧困は特別な運の悪い人の問題」とされがちです。今ここで問題にするのは「相対的貧困」^{II}「手取りの世帯所得を世帯人数で調整しその中央値の50%以下のライン」「年収127万円以下の個人・家庭」(OECD方式)。

この貧困も重大な被害をもたらします。現在日本では約15%の子ども(15歳以下)が貧困状態にあり(6人に1人)、「日本は子どもの相対的貧困率が他の先進国と比較すると高い水準にある」(「子ども貧困」^{*3})との指摘があります。

三、貧困の固定化

貧困は個人の努力不足ではなく、社会・政治・政策がもたらした構造的な問題と捉えるべきです。貧困に大きく関わる経済的収入や雇用形態は、小泉内閣の

▶執筆者プロフィール



神戸 修
こうべ おさむ

【略歴】 1960年生まれ。龍谷大学文学部文学（仏教学）卒業。同大学大学院文学研究科博士課程（真宗学）単位取得退学。現在浄土真宗本願寺派大阪教区天野北組西教寺住職。同組蓮光寺住職代務。同組組長。同派布教使。同派輔教。一般財団法人同和教育振興会事業運営委員。

【著書】『戦時教学と浄土真宗』（社会評論社）『人権理解の視座』（明石書店）『人権侵害と戦争正当化論』（明石書店）『十五年戦争下の西本願寺教団』（同和教育振興会）。

「新自由主義」的政策で大きく転換しました。非正規雇用や派遣社員の増大、労働者の「使い捨て」雇用が横行し、派遣切りが容易に行われるようになりました。新型コロナウイルス禍で真つ先に解雇され住む場所も失った人々は、このよう不安定な雇用形態で働いている人々でした。こういった雇用形態で働かざるを得ない人々は、もともと経済的に脆弱な立場にあったということは容易に想像がつかます。

困との闘い」を宣言し、グレートイコライザー（不平等是正装置）として「教育の充実」を打ち出しました。「教育」で国民一人一人が自らの貧困を克服する力を身に付け格差の是正につなげようということです。

しかし日本の場合、この教育が不平等の根源になっているということ、すなわち「貧しい家庭の子どもたちが学校で落ちこぼれることによって再び貧しい家庭を形成する悪循環」という指摘です（『見えざる階層的不平等』*4）。ここで紹介されている、1985年から2000年にかけて行われた『三重県高校生学力実態調

査』（県内全部の全日制高校在籍二万人の追跡調査）の「父学歴別高校卒業後の進路」では、「大学進学者の割合」で「父大卒52%」「父高卒34・2%」「父中卒17・2%」であり、「同和地区生徒の高校卒業後の進路」では「大学進学」が「地区外30・6%」「同和地区15・3%」という結果です。日本社会では高学歴者ほど所得が高い傾向が厳然とありますので、学歴の差は所得の差（逆に所得の差は学歴の差）につながります。詳しくは紹介できませんが、学歴・所得の悪条件・悪循環が集中し世襲されているのです。

四、どこに貧困が集中するか

貧困が集中する場所としてまず被差別部落があります。「部落差別と貧困」という視点から見えるのは「低学歴と低所得の密接な関連」「この二つの悪条件は世代を超え相続される」ということです。特に後者（相続）は「世襲」と言い換え可能でしょう。「貧困の世襲!」。貧

困は「身分」たる様相を呈しています。また「母子家庭」の貧困も深刻です。前掲『子どもの貧困』には、1990年から2004年に厚生労働省が行った『国民生活基礎調査』が紹介されています。そのうち「子どもの属する家族構成と貧困率」によると「全体の4・4%に過ぎない母子世帯が66%の貧困率を占めている」という結果が報告されています。現在こうした人々に起こっていることが、広範な人々にも起こっているということができます。

「身分」と並んで、ある社会集団を指す概念として「階級」があります。両者は違うものですが、現在の貧困の態様は「階級」概念で説明すべきものだとして社会学者の橋本健二さんが提唱しています。「80年代以降の『フリーター』の増加を皮切りに、非正規雇用の割合が増えました。もはや一時的な現象の帰結である『世代』ではなく、恒常的な『階級』と捉えた方がいい」（『朝日新聞』2019年7月17日付）。貧困層の固定化と世襲化

は社会学の分野でも大きな問題になっているということでしょう。

また橋本さんは他に大事な指摘をしています。「現在の」中間層からアンダークラスへの^{*}転落の不安の広がり」（前掲『朝日新聞』）です。中間層とは貧困層と富裕層を除いた「多数の善良な一般市民」というところでしょうか。実はナチス体制を支持したのはこの「転落の不安を抱える中間層」であり、この中間層はアンダークラスに転落する恐怖と不安のゆえに、強権的な指導者を求め、民主主義と自由の価値を否定し、より立場の弱い社会階層を蔑視してアイデンティティを防御し、差別的思想に親近感を持ちやすい傾向があるという指摘があります。

「ヒトラーは独裁制の樹立を求めたが、同時に国民の支持も望んだ。国民の支持を得るためにできる最大のことは、大量失業問題の解決だった。（略）ヒトラーはまず強力な指導者が事態を掌握していることを国民にわからせようとした」^{*}大部分のドイツ国民はそのような成功の

お返しとしてすぐにヒトラーを熱愛し、1945年に彼がおぞましい死をとげるまで支持したのだ」「ナチだけでなく多くの善良な市民たちも、ワイマール共和国の失敗した実験にうんざりしていた。彼らは周囲にはびこる退廃、腐敗、犯罪を目の当たりにして憤慨した。この状況下でヒトラー政権には、あらゆる類の民主主義、自由主義の活動に対して断固として行動する明瞭な政治的動機があった。こうして共産党をはじめとして反対政党をことごとく非合法化し、これを法と秩序の名において弾圧したのだ」^{*}。貧困に起因する社会不安がナチスのような過ちを繰り返すことにつながるのか、危惧されるところです。

五、貧困は差別である

「貧困」は特定の場所に集中し、かつ世代を超えて再生産されます。「富める者はより豊かに、貧しいものはさらに貧しくなる」のです。差別とは、人が生ま

れなど本人の意思とは無関係なことを理由に不当な処遇を受けることです。今の日本社会では、生まれた家庭や人間関係によって、既に悪条件（貧困など）が「約束」されているということでしょう。貧困をめぐる格差は、その固定化と世襲化ゆえに差別と呼ぶべき状況にあります。

六、どう向き合うか

何ができるでしょうか。子ども食堂などの試みもあります。目の前の人々に援助を差し伸べるのが各地で始まっています。私は、消極的ですが、「自己責任論の間違いを繰り返し確認する」こと、貧困に陥った人々に対して投げかけられる「あなたの力が、努力が、足りないからだ（時には貧困に陥った人自身がそう考えてしまう）」という言説に与しないことも大事だと考えています。貧困が差別であるということは、貧困は人権侵害であるということでもあります。人権侵害の常として、「被害者に不当に責任を負

わせられる」ということを、常に念頭に置きたいものです。

最後に、父親に「お金持ちほど強い人はいないよ」と言われた少年イリュエシヤはどうなったでしょうか？ 残念なことには、「金持ちほど強い人はいない」と言われて間もなく、少年は父親を心配しながら父親を残して病気で亡くなりま

す。格差と貧困を告発するはかない少年の肉体は減びました。

しかし、大作『カラマーズフ兄弟』は、本作でも重要な役割を果たし、ドストエフスキーが「カラマーズフ兄弟第二部」として構想しながらも、作家の死によって書かれなかった新たな小説の主人公に設定されていたアレクセイ・カラマーズフの言葉、イリュエシヤの友達の少年たちを前にした、「あの愛すべき少年を、決して忘れないようにしようではありませんか!」という言葉で閉じられます。

*1 『カラマーズフ兄弟』『ドストエフスキー全集』第10巻 小沼文彦訳 筑摩書房 1963年

*2 シーボーム・ロウントリイイギリスの社会学者（1871〜1954）

*3 『子どもの貧困』阿部 彩著 岩波新書 2008年

*4 『見えざる階層的不平等』鍋島祥郎著 解放出版社 2003年

*5 アンダークラスⅡ主にパートの主婦を除く非正規雇用の労働者を指す。60歳未満の平均個人年収は約185万円。職を失う恐れと先行き不安にさいなまれる日々を送る。こうした層は橋本の試算で900万人以上。若者から高齢者まで広がる。（『朝日新聞』2019年7月17日付）。

*6 『ヒトラーを支持したドイツ国民』ロバート・ジェラテリー著 根岸隆夫訳 みすず書房 2008年